

【コラム】

自然学校

辻 喜代司

Nature School Activities

TSUJI, Kiyoshi

京都府下唯一の村である南山城村の童仙房区と野殿区をフィールドにした活動について報告したい。京都大学大学院教育学研究科（教育実践コラボレーション・センター）が直接かかわるものとしては、安川由貴子さんや吉田正純さんの助教時代にスタイルが定まった「野童いなか塾」がある。「塾」では、季節感にあふれた自然観察会や、「風と雲の広場」と銘打った旧野殿童仙房小学校（2006年の廃校後も施設は維持されている。以下「旧小学校」と表記）での学習フェスティバルを継続的に開催してきた。いずれも区民に生涯学習の機会を提供する目的で設立された「野殿童仙房生涯学習推進委員会」との連携事業である。また、区内の女性グループが独自に「ふれあい土曜ひろば」（月2回）を開催し、地元の素材を活用した手作り講座を提供している。

旧小学校を活動の場に行っているのは京大や「ふれあい土曜ひろば」だけではない。「里山のがっこう」を運営する生活クラブ生協大阪（小出譲代表）は、組合員の家族に自然体験活動の場を提供する目的で、宿泊型の「はるのがっこう」「なつのがっこう」「あきのがっこう」プログラムを開発し、農作業体験や冒険体験事業を実施している。後者は、セキスイ（東京本社）がCSR（企業の社会貢献）活動として行っている区内の森林整備事業とリンクしたものである。

このような旧小学校を拠点にした活動は「自然学校」と呼べるだろう。「自然学校」とは「自然体験活動のための『場』『プログラム』『指導者』を年間を通じて提供できる施設や団体」だとされ、そこではキャンプ、ハイキング、自然観察、体験活動（農業体験・漁業体験）、生活体験（田舎暮らし）、自然を活用したスポーツなどが行われる（出典：西村仁志『ソーシャル・イノベーションとしての自然学校』みくに出版、2013年、5頁）。

「自然学校」に関する論考では、前平泰志先生が提唱する「ローカルな知」を起点として探求された「ローカルな知を学ぶ自然体験学習の可能性と課題—長野県泰阜村あんじゃね自然学校の事例から—」という野田恵さんの実践報告（日本社会教育学会編『〈ローカルな知〉の可能性』東洋館出版、2008年）があった。野田さんは、そこからデューイの「経験概念」を援用した独自の自然体験学習論を展開している（野田恵『自然体験論』みくに出版、2012年）。「自然学校」の重要性は、最近のESD（持続可能な開発のための教育）へ

の関心の高まりのなかで再認識されつつある。今年には日本政府が **NGO** とともに国連で提唱した **DESD**（**ESD** の 10 年）の総括年にあたるのである。

この **ESD** 研究においては「ローカルな知」の再評価が進められ、それを「地域の教育力」として見直す動きが出てきている（朝岡幸彦「地域の教育力としての〈ローカルな知〉」生方秀紀他編著『**ESD** をつくる』ミネルヴァ書房、2010 年）。「自然学校」と体験学習の多様性を、〈ローカルな知〉の視点から論議し、野殿・童仙房地域から発信できないものか、と現在考えている。ぜひ実現させたいものである。